まえがき

前世紀の二〇世紀は「戦争の世紀」と呼ばれることが多い。人類がはじめて、しかも二〇年ほどの戦間期を挟んで二度も経験した世界大戦が、この世紀を人類史における突出した存在にしている。にもかかわらず、二一世紀の私たちもまた、すでに幾多の戦争を経験している。新世紀の幕開けと同時に対テロ戦争が始まり、イラク戦争、ガザ紛争、ウクライナ戦争、アメリカ・イスラエルのイラン攻撃がそれに続いている。私たちが生きている現在もまた、新たな「戦争の世紀」として記憶されるのかもしれない。

「戦争」とは一般的に、組織化された集団間の武力衝突のことを指している。英語の戦争（ウォー）は古フランク語の「werra」に由来し、ドイツ語で乱雑、混乱していることを意味する「wirr」と同語源である。それは事件や犯罪のように、日常生活を脅かす一種の乱れであり、しかも人的・物的被害を伴う非常に危険な乱れである。現代のサイバー戦争やハイブリッド戦争は、この概念の外延をめぐる新しい問題を提起しているが[1]、本書は暴力の集団的行使というその中心的意味に焦点を当てている。

人間の歴史を紐解けば一目瞭然であるように、戦争ほど私たち人間に普遍的に根づいた慣行は珍しい。古今東西、大小の戦争は存在してきたし、それゆえに政治・経済・社会に深く根づいている。基地や軍隊が平時から存在し、かなりの軍事予算が国民経済に組み込まれ、記念碑や博物館を通じて国民の記憶に定着し、メディアや創作物のなかで繰り返し描かれる。戦争は人間にとって文化の一種だという評価

さえあるかもしれない――「無数の事実が、戦争それ自体が強烈な魅力を発揮していることを証明している」というわけだ（ファン・クレフェルト、二〇一〇：一一）。

にもかかわらず、戦争の現実はつねに私たちの日常からかけ離れた側面をもっている。なぜなら、戦争を通じて人は殺し、殺されるからだ。確かに日常生活でも、一人の人間が亡くなることはある。私たちはそれをきわめて深刻に受けとめ、生前にあらゆる手を尽くし、それでも生じた死に対して心を痛めるだろう。これほど重大な人間の死、しかも大規模な死が、戦争の現実を覆い尽くしている。一九世紀半ばに国際赤十字を創設し、第一回ノーベル平和賞を受賞したアンリ・デュナンは、その光景を次のように描写している。

> 両親のお気に入りの息子、些細なことにも優しい母が常に心をくだき、何年にもわたって育て続けて面倒を見続けてきた息子、あるいは家族から敬われながら妻と子をあとに残した立派な将校、そして出兵の前に母や兄弟、年老いた父に別れを告げた若い兵士、それに花嫁に別れを告げた若者もいる――彼らはいまや、みな汚物や埃の中で血まみれになって横たわっている。（デュナン、二〇〇三：一七）

本書の主題は戦争倫理学である。この分野は、倫理学の理論枠組みを参照しながら、戦争と平和をめぐる実践的諸問題に対して特定の判断や評価を導こうとする、応用倫理学の一部門である。戦争が日常的な事件や犯罪とは比べ物にならない規模の危害をもたらす以上、その是非が人々の倫理的関心となるのは当然である。なぜ戦争に訴えることは正当化されるのか。なぜ犯罪の加害は到底許されないのに、戦争の加害は許されるのか。なぜ人間の命は、平時と戦時でこうも重みが違うのか。

近年この分野に特化したハンドブックも刊行されているように（Lazar and Frowe, 2018）、戦争倫理学

は過去にも増して多数の論者を惹きつけて研究が進んでおり、個別テーマの拡大も著しい。とりわけその中核となるのが、古典古代から現代まで、西洋思想において連綿と受け継がれてきた正戦論の伝統である。本書の特徴は、この中核に加えて、現実主義・平和主義といった近接理論を織り込みつつ、戦争倫理学の現在地を、ひとつの単著のなかで体系的・網羅的に見通してみようとする点にある。

本書ではこの主題を、以下の一二章を通じて見ていく。はじめの三章では、戦争倫理学の全体像を、正戦論・現実主義・平和主義の理論枠組みから整理する［第1～3章］。続く五章では、戦争倫理学の中核となる正戦論の伝統を、開戦法規、交戦法規の順で取り上げる［第4～8章］。その後の三章で、現代的戦争として新たな論点となっている三つの戦争を取り上げる［第9～11章］。最後に、戦争の終わり方に関する倫理的考察を通じて、戦争倫理学のさらなる発展的テーマに取り組む［第12章］。

戦争倫理学という主題は、人間の生死にかかわる非常にシビアな選択を含まざるをえない。だからといって、こうした問題提起を避けて通るわけにもいかないのが世界の現状である。そうである以上、ただないふりをするのでもなく、かといってただ受け入れるのでもなく、ある種の居心地の悪さを感じながら、この世界をどうすれば少しでも改善できるのかを考える必要があるだろう。戦争という事態とその結果を深刻に受けとめるからこそ、まずは戦争倫理学の知見に耳を傾けてみてはどうだろうか。

【注】

（1）戦争を含む武力行使が禁じられている今日の国際社会を前提とすれば［第2章Ⅲ2］、そもそも「戦争」について論じる余地があるかどうかが問われるかもしれない。とはいえその後も、「○○戦争」と通称される大小の事態は生じてきた。本書では、戦争の歴史を通時的に眺めるべく、戦争という言葉を幅広い意味で用いる。